

グングン上達する 認知症のみかた

原著タイトル

Common Pitfalls in Cognitive and Behavioral
Neurology: A Case-Based Approach

金城紀与史，小林俊輔【監訳】

評者

福武敏夫

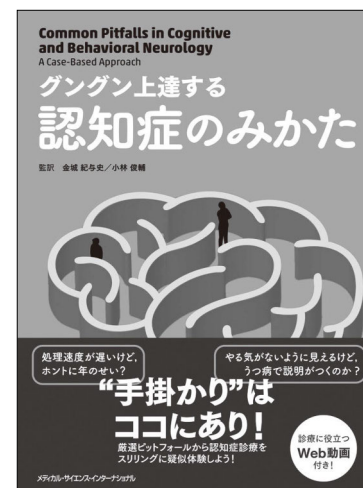
亀田総合病院 脳神経内科／脳神経センター

小説などではない書籍を手にとると、はしがきや序をまず読むようにしている。それは著者（ら）の思いが込められているからであり、通読する場合でも拾い読みをする場合でも読者に読み方を指南してくれているからである。翻訳本のときは、さらに、少なくとも原タイトルを見るようにしている。

この本の原タイトルは“Common Pitfalls in Cognitive and Behavioral Neurology: A Case-Based Approach”であり、「認知的・行動学的神経学におけるよくある落とし穴：症例を踏まえたアプローチ」となる。そこには本書の3つの特徴が示されている。第一は、認知症（私は用語としてデメンチアを好む）における認知的側面とともに、行動学的側面に関心が払われている点である。行動神経学的症状、すなわち BPSD (behavioral psychological symptoms of dementia) は本邦では時として「認知症の周辺症状」とされているが、決して「周辺症状」ではなく、しばしば「中核症状」なのである。第二は、診断する際の Pitfall (落とし穴、思わぬ危険) の紹介に貫かれている点である。拙速な

判断は予期せぬ失敗から患者や医療全体の負担を増加させているのである。第三は、各章は、練られた思わせぶりの短いタイトル（例：「いつもの彼じゃない」とか「発話に間がある」）の下に病歴が記載されている点である。読者は必ず病歴を精読してから（フォントが解説よりやや小さいのが気になるが）、何が落とし穴かを推測しておいて解説に進むことが推奨される。整えられたいわゆる「教科書的」な記載で診断しようとする、事象（症例）における「幹」と「枝葉」の区別がつけにくく、誤診につながりやすい。本書はその際の「だが待てよ」というポイントが十分に記述されている。そして帯に書かれているが、もう1つの特徴として、3分の1の章に Web 動画が付けられ、言語や高次脳機能症状などを具体的に見ることができる点がある。

さて、翻訳本は私を含む日本語を母語とする読者には読みやすくありがたいが、時には「この表現は英語ではどうなのか」と気になることがある。では原本を購入する必要があるか？ 実はその必



要はない。原本のタイトルをネットで検索すると、順不同であるが、たぶんほとんどの症例の英文が入手できる。ある意味で本書が英語圏で人気がある証拠であると思う。そしてついでに英語表現を勉強できれば二重に学力の向上につながると思われる。

最後に訳者に触れておこう。翻訳は複数の現役医師による分担執筆であるが、おそらく監訳者のリードによって訳語などが統一され、専門性の高い用語の解説と高頻出用語の巻末収載、重要な言葉への英語付記、そして必要な箇所には訳注がつけられている。監訳者のお二人は、私にとって嬉しいことに当院で研修された方で、後にそれぞれの専門領域で指導的立場に立たれて後進の教育に熱心なことが知られている。

B5 変・224 頁

2024 年 9 月

定価：5,720 円

(本体 5,200 円+税 10%)

[ISBN978-4-8157-3118-2]

MEDSi 刊